「航西小記」について

滝　沢　由美子

以前に本誌でふれたことのある『慶応慢録』中に見られる「航西小記」は，面白い記事なので，その一端をここに紹介しようと思う。

それは，福沢諭吉を先生と仰ぎ，英学に秀でていた肥後隈本藩士岡田攝三が外国奉行に従いフランス，イギリスに行った時の見聞録である。その序に航西小記と題した理由として，「福沢子圃先生往年再度西洋諸州を遍歴し（略）稿已に成て西洋事情と題言」していることから，「先生は其大なる者を書し余は又其小なるものを記す　因て題銘して航西小記と云や」と述べている。『西洋事情』を念頭に置いて書かれているので，たとえばイギリスの議事堂を見学した折の記事に，内部の様子，二院制や議事参加の仕組など聞きとった事柄を記した後，「議事の事は西洋事情に詳なり　故に之を略す」とあるように，『西洋事情』に書かれていない事や変化した事などを抄記している。

慶応元（1865）年5月3日江戸を発ち，5日横浜港を出帆，上海，香港に上陸，シンガポール，ペナン，セイロン，アデンを経て，6月26日スエズ着，スエズから蒸気車でカイロ経由アレキサンドリアへ，そこから乗船し7月5日マルセイユ港に到着。ツーロンの軍事工場，病院，リヨンの織物工場等を見物し，7月17日パリへ。借家を拠点に公園，墓地，ルーブル美術館，動物園，博物館，ナポレオン一世廟，老兵院，貧院，盲院などを見聞。10月21日イギリスへ渡り，ロンドンの諸公園，テームズトンネル，新聞社，銀行，老兵館と幼学校，地下鉄，国王廟，議事堂などを見物，蒸気車で訪れた3都市では，鉄鉱所，造船所，港湾内や台場（要塞），耕作器械や線路などの工場，セメント工場等を見物。11月19日パリに戻り，11月30日より帰途についた。往路とほぼ同じコースをたどるが，所々での見聞，記録は忘れていない。たとえば，カイロ出発2時間後に汽車が故障し，直るまでの間も近くを遊観，家屋は土泥を以って塗立て，「一屋敷室恰も蜂巣の如く　此一屋を村と称す而て一室毎に一族相共に起居す」，室の高さは一丈に過ぎず家財は無い。土の上で生活しており，「戸外室内に拘らず厠を用ゆるなし実に人骸にして獣行とも云へべし」と記述している。セイロンでは上陸し，釈尊廟に詣で，附属寺院の僧と談話，経典を読む音調は日本の禅僧の誦経と同じであること，経典は短冊様の板に錐で印字されていることを記している。横浜には1月26日着，2月1日に江戸に入る。以上の日付は，11月8日「此日は西洋12月25日にして欧羅巴諸州皆耶蘇を祭る」とあり旧暦と解されるが，9ヶ月間に及ぶ長旅である。

記述は月日を追い，訪れた港や町，施設などについて見聞した事，関連の説明たとえば人口，商船や軍艦数，物価や使用人の給料，兵制，医療制，イギリスの輸出入，産物，鉄道等々について，順々に読みやすい文章で書かれているので旅行記を読む面白さもある。

全文の詳細及び内容の検討は別の機会に譲るとして次に一記事のみ紹介しよう。ロンドンの「タイムスオフヒース，新聞紙書板行所」について。板行の器械は12，1器械で1分間に2,600葉，毎日平均150万葉摺る。蒸気器械なので一器所各2人居るのみ，欧州の新聞は100年来盛んで，毎日出版のものは主に一国内の新聞を記し，週一度のものは世界新聞紙と称して全世界の形態を詳記する。毎日数100万葉が摺られ国内外へ送られる。摺るのは政府が行うが売捌くのは商社で，商社は前以って入用数を申込み売れ残り分は商社の損失となる。英仏ともガス燈が普及しているので，昼夜，新聞の読み歩きの者多い。パリ市内大通りの新聞店は1町内に3～4ヶ所。価格は2～3ペニー（1ペニーは60文位）に過ぎない。記事は以上である。

全文を通して特に驚いたという記述は，地下鉄について「此の如き洪大の普請世界又有る事なしと云ふ　実に人力を以て斯る巧を為す鬼神も又驚くなるべし」に見られるだけである。しかし英国では石炭を多数の蒸気車，蒸気船，造幣局や諸製造所の動力に，各戸でも薪の替りに用い，外国にも送っている。また国中の至る所に鉄を用い欧州中英国の右に出るものなしと書いている。活況を呈していた当時のイギリスの状態を彷彿とさせ，見聞した当人の意識や当時及びその後の日本の発展過程を考えると興味は尽きないのである。